



# 社会科教育講座 西田 慎 教授

## 1960年代のドイツにおける社会運動と文化変容に関する研究



キーワード ドイツ史/ 1968年/ 緑の党/ エコロジー

### どのような研究をなぜ行っているか

2021年のドイツの総選挙では、エコロジー政党の緑の党が第3党へと躍進し、日本でも大きな注目を集めました。しかし緑の党という政党がどういう政党なのか、意外と正しく理解されていません。エコロジー意識の高い市民が集まって設立した環境政党なのでしょうか？それとも社会民主党に飽き足りない人たちが、同党の左に立ち上げあげた左翼政党なのでしょうか？

実は緑の党は、1968年前後の若者や学生による社会変革運動（「1968年」「68年運動」ともいう）を経験した「68年世代」が結成した政党です。彼らは革命の夢が破れた後、既存の体制の枠内で社会の変革を実現していくことを決めました。どのようにして、彼らが緑の党へと行きついたかは、下の図を見てください。反原発運動や反核平和運動のような「新しい社会運動」を母体に、ドイツ統一前後には、東ドイツの民主化運動の流れも取り込んで、緑の党は今では政界に確固たる地位を築きました。

緑の党に限らず、「1968年」はドイツの社会に大きな刻印を残しています。ドイツのキオスクではどこでも売っている「ターツ」(taz)という全国紙も、「68年世代」によって創刊された新聞ですし、教育でも「反権威主義的教育」は「1968年」の産物とされます。「過去の克服」も多文化主義も、「1968年」が大きな役割を果たしています。それゆえドイツ史では、「1968年」を政治や社会を変えた大きな転換点として、1949年に次ぐ「第2の建国」と呼ぶほどです。

こうした「1968年」「68年運動」が、ドイツの政治や文化をどのように変えたのか？これを他国とも比較しながら、研究しています。

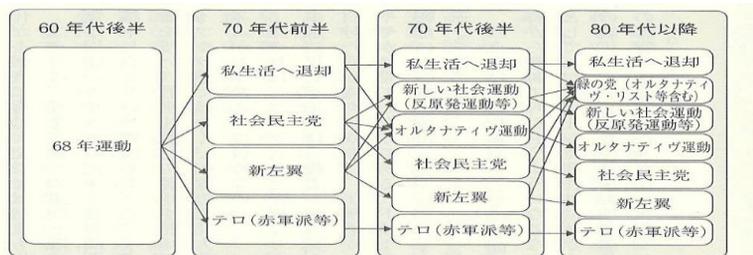


図 「68年運動」から緑の党への流れ  
出典：西田慎「緑の党」西田慎／近藤正基編『現代ドイツ政治—統一後の20年』ミネルヴァ書房、2014年、86頁

### 研究成果をどのように活用し、どのような貢献ができるか

2022年度からの新しい学習指導要領の下で、高校では従来の世界史に代わって、日本と世界の近現代史を中心に学ぶ「歴史総合」が必修科目になりました。同科目では「1960年代」や「1968年」に関する記述が増えると言われてはいますが、どのように教えたらいいのかわからないと戸惑っている人たちにも、ドイツの「1968年」に関する私の知見を役立てることが出来ます。

また近年、日本でも「1968年」への関心の高まりからか、マスコミにコメントを求められたり、講演を依頼されたりします（最近では「論点：あさま山荘事件50年」毎日新聞全国版 2022年2月16日付朝刊など）。また「1968年」の産物であるドイツの緑の党に関しても、ドイツのアクチュアルな政治への関心から、同様にコメントを求められます（最近では「日曜に想う：「少なくとも1人は女性」のすすめ」朝日新聞全国版 2022年1月9日付朝刊など）。その場合でも、ドイツの「1968年」に関する知見を踏まえたうえで、日本などの事例に当てはめ、話すようにしています。

### これまでの連携研究や社会貢献活動の実績

- NHKドキュメンタリー番組「新・映像の世紀」に取材協力 2016年2月21日放送
- 講演「戦後ドイツの「1968年」～日本との対比から～」奈良シニア大学奈良校・平成30年度一般教養講座 2018年6月7日
- 講演「ドイツ緑の党の誕生—「1968年」からエコロジー政党へ—」Klub Zukunft 第184回月例会 2021年12月23日

